

3) 小児肝腫瘍 (mesenchymal hamartoma) の2例

近藤 公男・岩淵 眞 (新潟大学付属病院)
大沢 義弘・山際 岩雄 (外科)
広田 雅行

最近我々は乳児及び小児の肝間葉性過誤腫 (mesenchymal hamartoma) の2例を経験したので報告する。

第1例は4カ月の女児で、肝嚢胞の診断にて手術施行。肝右葉の単房性嚢胞と肝左葉の多房性嚢胞の所見にて、嚢胞切除術施行。組織所見より、間葉性過誤腫が肝両葉に嚢胞を形成したと考えられた。

第2例は2才の女児で、肝右葉の多房性嚢胞の診断にて手術施行。肝右葉を占拠する多房性嚢胞の所見にて、肝右葉切除術施行。組織学的に間葉性過誤腫と診断された。

小児肝腫瘍のうち間葉性過誤腫は、乳幼児、特に2才以下の年少児に好発する希なる良性腫瘍である。右葉に好発し、多くは腫瘍内に大小多数の嚢胞を有し、組織学的には間葉組織の増生を特徴とする。臨床的には急速に増大する無症状の腹部腫瘤を呈するが、全身状態は良好であり、外科的切除で完全治癒し、悪性化はないとされている。

4) 画像診断上特異な所見を呈した肝門部胆管癌の1例

村山 久夫・塚田 芳久 (信楽園病院内科)
齊藤 敦
清水 武昭 (同 外科)

症例は53才男性、多飲酒家、自覚症状なく供血の際肝機能異常を指摘され入院、ビリルビン0.7mg, GOT 85, GPT 147, γ -GTP 958, HB 抗原, HA 抗体共に陰性, CA 19-9 が340と高値であった。エコーおよびCTではカントリー線を境として右葉は脂肪肝の像を左葉は肝内胆管の拡張を示した。ERCPでは総胆管の拡張は認めないが肝門部に約10mmにわたる狭窄をしめし胆嚢は造影されなかった。門脈造影では左枝は造影されず右枝内に陰影欠損がみられた。手術では肉眼的には胆管癌は15×12mmであったが組織学的には粘膜下を肝内まで浸潤していた。門脈左枝は血栓で閉塞しておりこのため局限性脂肪肝を生じたと考えられた。

5) 肝疾患ことに肝細胞癌における PIVKAL-test と PIVKA-II の検討

加藤 俊幸・斎藤 征史 (県立がんセンター)
佐藤 正之・丹羽 正之 (新潟病院 内科)
吉田 英春・小越 和栄

肝疾患における PIVKA-II を Latec (PIVKAL-test) と ELISA (E1020) により測定した。両値および AEP 値に相関は見られなかった。PIVKAL-test はスクリーニングとして簡便で有用であったが、閉塞性黄疸、非代償期肝硬変、肝炎などでも陽性を示し、特異性は低かった。ELISA による PIVKA-II の陽性率は肝細胞癌12例中6例50.5%、転移性肝癌9例中3例33.3%であったが、肝硬変などの他の肝疾患ではすべて陰性であった。肝細胞癌など他の肝疾患ではすべて陰性であった。肝細胞癌では特異的に 1.0AU/ml 以上の高値を示し、とくに AFP 200ng/ml 以下の4例中2例50%でも陽性であった。AFP 測定に PIVKA-II を併用することにより、肝細胞癌の83.3%が診断可能となった。細小肝癌診断には限界があるものの、AFP 低値例や肝硬変における肝癌併発例の診断に有用である。

6) インターロイキン2 および養子免疫法が奏効した肝細胞癌の1例

鈴木 健司・荒川 謙二 (新潟大学)
太田 宏信・渡辺 俊明 (第三内科)
上村 朝輝・市田 文弘

症例; 76歳, 男。アルコール性肝硬変として某医にて経過を観察されていたが、昭和61年より AFP の上昇がみられ肝細胞癌の精査と加療を目的に昭和62年4月当科へ入院した。入院時肝を正中線上触知し、検査成績では血沈促進および軽度の肝機能異常を認めた。また血中 AFP は 681ng/ml Fucosylation Index は33%であった。エコー上 S₃ に径2cmの低エコー域を認め、lipiodol CTにて同部位に lipiodol の沈着を認めた。肝左葉 S₃ 領域の肝細胞癌と診断し IL-2 筋注を開始。更に自己リンパ球由来の LAK 細胞を末梢静脈より輸注する養子免疫療法を計5回行った。治療開始16週後、AFP は 157ng/ml まで減少、エコー・CTにて腫瘍の部分壊死像がみられ、 γ IL-2 および養子免疫療法が奏効したものと考えられた。

7) 当院における劇症肝炎の臨床的検討

銅治 康之・藤田 一隆 (新潟市民病院)
佐藤 明・月岡 恵 (消化器科)
何 汝朝・市井吉三郎

劇症肝炎は死亡率の高い疾患であるが、近年血漿交換療法、人工肝補助装置などの開発、導入に伴い全国集計の生存率は25%以上の改善が見られてきている。今回我々

は当院開院昭和48年から昭和62年8月までの約15年間に発症した劇症肝炎の臨床的検討を行い、若干の知見を得たので報告した。

劇症肝炎例は、15年間で14症例あり、生存者1名、生存率7%と、全国集計に比し著しく低率であった。その理由として、①50才以上の高齢者が多かった。②生存率の低い亜急性型が多く、更にその大部分が悪性基礎疾患を持っていた。③劇症化診断の遅れたものが多かった。以上のことが考えられた。又肝炎疑診時に、白血球 $10,000/\text{mm}^3$ 以上、血小板 $10\text{万}/\text{mm}^3$ 以下のものは劇症化への十分な注意が必要と考えられた。

8) HBV キャリアからの急性発症の臨床病理学的検討

村山 英行・野本 実 (新潟大学 第三内科)
上村 朝輝・市田 文弘 (新潟市民病 院消化器科)
佐藤 明

B型肝炎ウイルスキャリアからの急性発症の臨床病理学的特徴を明らかにする目的で急性発症例34例を対象に、AVH 119例を対照に種々の検討を行った。その結果、急性発症例の臨床症状は、AVH に比し概して軽く、T-Bil 値、GOT 値、GPT 値、Al-p 値、 γ -GTP 値は低く、TTT 値、ZTT 値、 γ -gl 値が高い傾向にあり、IgM型HBc 抗体は21例中2例で陽性を示した。また、その組織像は、AVH に比し Kupffer 細胞の腫大が軽度で、門脈域の拡大に差は認められないものの、線維化、piecemeal necrosis、門脈域の形質細胞浸潤、門脈域や門脈域周囲の炎症反応が強い特徴を有し、ヨーロッパ分類のいわゆる“acute hepatitis with possible transition to chronic hepatitis”の範疇に入るものと考えられた。

9) 高 γ -グロブリン血症を呈した肝疾患例の病理学的検討

有田 徹・村山 英行 (新潟大学 第三内科)
野本 実・上村 朝輝
市田 文弘

(目的および方法) 肝疾患の中には、しばしば高 γ -グロブリン血症を伴うものがみられる。今回、我々は最近16年間の肝生検および剖検例3169例中、 γ -グロブリンが $3.0\text{g}/\text{dl}$ 以上を呈した54例を対象に臨床病理学的検討を行った。(結果) ①54例を組織学的に検討するとBNや小葉改築傾向を伴った慢性肝炎(活動性)が19例、肝硬変が19例と多かった。②54例中、ANA 陽性は13例(LE 陽性は2例)で、HBs 抗原陽性は10例で互いに重

なる症例はなかった。③ γ -グロブリン分画をみるとPBC ではIgM、アルコール性肝障害ではIgAを主体とした上昇傾向がみられたが、必ずしも特徴的な所見とは言えなかった。④高 γ -グロブリン血症を伴いながらも組織変化が軽度の場合には他の基礎疾患の存在の有無の検討が必要も思われた。

10) 家族内集積を認めた原発性胆汁性肝硬変の2家系

宮崎 裕・川口 秀輝 (新潟大学 第三内科)
渡辺 悟志・上村 朝輝
市田 文弘

原発性胆汁性肝硬変(以下PBC)は家族内発生や家系内にさまざまな免疫異常が認められることから、免疫遺伝学的因子の関与が推定されているが、その報告は少ない。今回、我々はPBCの集積を認めた2家系を経験したので報告する。検査項目は血液生化学、免疫グロブリン、自己抗体、さらに一部はHLA抗原の検索も行った。第1の家系はPBCの母娘、姉妹例の他に抗平滑筋抗体陽性1例、IgM高値1例を認め、第2の家系ではPBCの姉妹例の他にAMA陽性1例、IgM高値1例を認めた。一部に行ったHLA抗原の検索では、一定の傾向を認めなかった。今回行ったHLA抗原の検索症例数は少数のため、今後本抗原の測定例数を増やして検討する必要があると思われる。

11) 3年間に経験した自己免疫性肝疾患の検討

川村 正・遠藤 次彦 (長岡赤十字病院 消化器科)
広瀬 慎一

1984年7月～1987年9月までの間に17例の自己免疫性肝疾患を経験した。その内訳は、原発性胆汁性肝硬変(PBC)11例(diagnostic 5例, compatible 4例, mixed type 2例), PBC(AIH)4例, ルポイド肝炎(LH)2例で、PBCの3例が男性である以外全例女性であった。全例経過中に少なくとも1回肝組織像(腹腔鏡下15例17回, 手術的2例2回, 剖検2例2回, 反復4例)を確認した。PBCの2例がHBs抗体陽性を呈した他全例、HBV関連ウイルスマーカーは全て陰性であった。17例のうち、興味ある画像所見を呈したPBCの1例、診断治療に苦渋したPBCの1例、合併した早期胃癌の切除後にANA等を含む全検査成績が正常化したAIHの1例および薬剤によりLH様の病態を呈した1例について概要を報告した。